

創立二十周年を迎へて

住岡夜晃

年月の流れは早いものである。

光明団生れて二十年、八月一日から一週間、二十周年記念会を開催することになった。私にとつては感慨無量のものである。このごろ私は毎日、過去を追憶し、現在を憶ひ、深い内観反省にひたらされている。よくも続いて下さったものである。まづ私におしよせるものは深い感謝である。本仏世尊、聖人に向つてのことは言ふまでもないことながら、多くの同胞が心から助け、一緒に精進して助けて下さった。その同胞のお力のたまものである。今日あることは決して私の力ではない。多くの恵まれた同胞のご精進・ご報酬・信力の総和に外ならない。

今私は、多くの御同朋御同行の御念力、証誠護念を頂いている。念じて下さる多くの同行善知識がある。私の地上における寿命さへ心配して下さる御念力を念ふ時、私の胸の底には、それ故に熱いものがこみ上げてくる。そしてその背後に本仏の大悲の本願力があることを憶ふ時、全我を投げ出して合掌せずにいられない。私はしあわせである。同胞は如来より賜うたる私のすべてである。

仏の本願力は、世尊聖人の真実教を通して、出世の本懐を満足させて下さった。

御同朋は大地に於ける究極の世界である所の同一念仏無別道故の真実相を具体的に知らせて下さった。真実教の真実であることを身を以つて知らせて下さったのも、念仏の世界が

最後の尊きであることを立証して下さったのも、經典の文字の生きていることを身を以つて説明して下さったのも、皆、同胞であった。その同胞が、如来浄土の心を心として、今、人間業苦の中に、本願円頓一乗の至境を身を以つて顕現したまふを拝む時、合掌せずにいられやうか。

私は今、念仏の同胞、菩薩大士に向つて合掌して念仏の中に深甚なる感謝を捧げずにはいられない。

浄土門に帰して二十一年、牛の歩みと言いたいが、蝸牛の歩みにも似た、まことに遅々たる歩みではあった。細いあるかなしかの歩みではあった。しかし細々ながら、お念仏の二十年が続いて下さったことは有難いことであつた、うれしいことであつた。何にも替へられない有難いことであつた。これひとへに、不断光仏の本願力のご廻向である。

憶、続いていてよかつた。まことに続いていてよかつた。私はこの二十年に数へつくせぬ尊いみ法をいただいた。八万四千の法門蔵、悉くこれ六字名号の徳ではある。名号六字を獲得する所、一切功德蔵たる大行の徳なるが故に、その中にもつているのではある。しかし、新らしく一句一句の大法を聞かしていただく時、大信は豊らかなる喜びとなる。

如来の教法は真実にてまします。大無量寿経は聖人の宣言の如く唯一の真実教にてまします。如来の本願のみ真実の宗教にてまします。そのことが、ほのかではあるがまことに確かに知らして頂くことが出来た。

私は悪業深き存在である。

罪悪深重煩惱熾盛の悪衆生なればこそ、人生五十年が業苦波乱に満ちたものなのである。

回顧すれば、ただ煩惱の波浪高かりし生死の海の航行にすぎず、合掌五体投地して懺悔し奉る。

願わくば如来廻向の本功德力を以って、平等一切に施し、同じく菩提心を発して、共に安楽の国に往生せん。

回顧すれば、昭和六年夏、鳥取県東郷温泉において講習会を開催して満七年を経過した。昭和五年の夏までは備後の鞆の浦の明円寺において講習会を開いていた。この時代までは、団は大衆を獲得することに進んでいた。しかしそれは、風の中に灰をまくが如きものであったことがわかり、急角度に方針は変わった。大衆ではない私だ。私自身がもっともつとみ法を頂くことに懸命にならねばならない。大衆をどうするよりも前に私は私であらねばならない。誰をどうするよりも、世間から何と言われるよりも、何が何になるより前に、私が私でなくてはならない。教人信より先づ自信、化他よりもまづ自行だ。そうだ、自行の白をつくのだ。私の周囲には縁のつながらる人がある。私はその一人一人を明かに見ようとした。そうして「来るを拒まず去るを追わず」因縁のある人と一緒に、より明らかに、そして静かにお念仏の一道を精進しよう」と決心した。白の中には一升あらうと五升入っておろうと、不断に白をつけばいい。私は懸命に道を求めねばならない。

五周年大会は大正十二年四月、濟世軍の真田増丸師を招聘して飯室で挙行された。それはまことにまことに大会であった。十周年大会は龍大の亀川教授に来て頂いて広島市の芸銀ビルで開催された。それは五周年につぐ大会であった。しかし昭和八年十二月の十五周年記念講習会は静かなものであった。街に宣伝もせず、あの八丁堀の借宅で形は極めて静かに、しかし初めて真剣な空気の中で、一週間講習会が開かれた。私は道綽を講じた。形において縮少された、しかし内容において充実しはじめた。

その年の暮れに、まだ造作最中の今の本部に移った。本部に移ってから足かけ六年、毎月の例会講座三日間、年三回の一週間の講習、一月の教育部会、御正忌等、有難い会座を開かせて頂いて現在に至った。私の心がけさせて頂いたことは「世尊聖人のみ教に私心を入れないで頂かう」ということ一つであった。そしてそれが、どれほど有難いことであるか、どれほど有難いことになって行くものであるかということを、事実の上に知らして頂いたことは、何と云っていいかわからない有難いことである。

私はついに僧侶にならなかつた。十年も前には、私にさかんに僧侶になれと勧めてくれる人達があつた。しかしどうしてもその勧めてくれる人の言葉を肯くことが出来なかつた。それは光明団が社会的のびてゆく為にも、私の生活が楽になるためにも、いわゆる常識的な考へ方をする限り、僧侶になる方がよかつた。しかし私は、世の中が認めるの、金がた

くさん入るの、大会から大会の講師に招かれるの、そうしたことで僧侶になることは出来なかった。そして色んな考へが遂に私を僧侶にしなかった。そしてそれをよいことをしたと今でも思っている。と言って何も僧侶がいけないというのではない。

私の心の底の声がかすかではあるが「汝は大法の為に死ぬ」とさゝやいた。そうと心が定まって見れば、大した問題は世の中におきて来ないことがわかった。追はれたら追はれてゆく、招かれたら招かれてゆく、疑われたら疑われてゆく、み仏のみは知っていられる。私の悪いことも愚かなこともデマ放送をするやうに、誰がするのか今でも随分やられているらしい。それがほとんど愚にもつかないことばかりだ。それを聞くと一寸はむかつとするが、しかしそれよりも私にはもつともつと大きなことがある。それは大聖聖人のみ教に不忠実であつてはならないことであつた。世にも世にも一大事とはこのことである。もちろん如来大悲本願には微塵の疑惑なく、念仏をよろこぶ身でも、よくよく考へて見れば、そこもここも相すまぬことだらけである。

何時しかに私の大事はそれだけになった。蓮如上人は「御門徒の進上物をば御衣の下にて御拝み候」とあり「御自身の召物までも御足に当り候へば御頂き候」とあるが、私どもの如き凡俗の身が一体どうしている。かうして聖者の生活を頂けば、相済まぬことだらけである。

私にあることを人が言うのは当然である。無いことを言われるのは私の宿業である。一切あるがまゝを黙って頂いて、一筋の道を歩ませて頂けばいい。かうした思ひで生きさせて頂くと、世の中の誤解や非難の為に夜も眠れないというほどのことはない、案外やすやすと今日まで生きさせて頂いたのであつた。

ほめられても非難されても、誤解されても正解されても、盛んになつても衰へても、あるがまゝを見とゞけてゆく。しかし自分の歩ませて頂くことは力いっぱいやらせて頂く。力いっぱい精進させて頂いて、そして後は一切を成行きにまかせてゆく。そうしたゆき方は私の心境をいつもゆとりのあるものにして下さつた。したがって、ずいぶん力こぶを入れた念入りな反射運動があつても、私は決して耳や眼を覆わないで見えるだけ見せて頂くし、聞けるだけ聞かして頂いてゆく。けれどもその為に、私の歩む道が広くならうと、狭くなるうと、私にはそれを見とどけてだけいけばいいのだから、ちつとも苦痛ではない。それを通して、人生の闇の深さ、闇の相を知らせていただき、かつ、そこに私に因縁のある一人の美しい白蓮華が拝まれたらいいのである。

事実において、そうした時には、そこには必ず、如何なる悪魔の暴力にも滅ばない道の戦士が生れている。金剛の行者が現われている。それは二十ヶ年を通じてのありがたい経験であつた。盛衰を越え、毀誉を越え、苦楽を越えるということが、一切の悪魔をして使りなからしめる唯一の道であることを世尊聖人によって教えて頂いた。したがって私に、こう

したら世俗が歓迎するの、こうしたら世に認められるの、こうしたら攻撃がなくなるのと、賢く世の中を渡ることを言つて聞かせてくれたとて、それは無意味なことである。正しく念仏道を歩めと叱責してくれる声だけが親切である。

世の中を上手に渡らうとすることがすでに無意味な安逸を求めること、第一義の問題を棄てた歩み方なのである。こうした大法第一の歩み方をしたら、後には橋の下で菰をかぶつて死ぬるやうになるかも知れないと思つた。しかし事實は反対へ反対へと行つて、同胞の御親切がとても私を橋の下へやりそうにもない、いささか拍子ぬけがするし、氣味の悪い思ひである。

いつもありのままを見とどけて、しかも清浄の大法、清白の法に情の垢を入れないで聞かせて頂く。私自身の闇の深さ、私の周囲の人の眞の相、世界のほんとうの相が知りたい、それがわかればわかるほど、大法の眞実とその尊いことがわかつて来る。私が俗人であつたがために、こうした私の願ひも十分満足させて頂いたやうである。何故ならば、法衣を着ておれば七難を包み、十悪を覆ふことが出来、随分おかしな者でもそのまま通れるのに、私にはそれが許されず、法衣には味方する人でも、俗と見れば刃を向ける、そうしたことは私だけに知らせて頂いたありがたきであつた。

だが、俗人が私の味方でも敵でもないやうに、僧侶もまた味方でもなく敵でもなかつた。したがつて私は仮想敵國をつ

くつて運動の対象にしたりしない。既成教團に対しても私は敵対行動をしない。

マルチン・ルーテルのやうに外に向つて攻撃文を突きつけるべきではない。それはいつも内に向つてなざるべきである。我等の歩みに向かつてなざるべきである。したがつて私は、私の周囲、私に近い人にほど厳しくせまる。決して人間的なものを出して馴れあつてはならない。一緒に長い間歩めば歩むだけ大法によつて結ばれていなければならぬ。

人間的な愛によつて結ばれた者は一時の感情はとも美しいやうでも、必ず後は汚いものになる。であるから愛によつて人を引きつけ、人間煩惱の喜びさうなことで人を味方によつて人としてはならないと共に、憎によつて逃げてゆく人を愛によつて引きとめようとしてはならない。私は又その通りにして来た。なんぼ心安い間であらうと、道ならぬことをしてしかも何んとかそれを懺悔もせず闇に葬つてもらつてかぢりつかうとする、軌道に乗らなければお別れである。地位を与えなかつた、親切にしてくれなかつた、何とか彼とか言ひつつ去つてゆく人。私は悲しくもそれを追はずに私の道を歩む汚くても、大法をまげても、そうしたものをそのまま許すということは、全体が垢づき泥まみれになることである。

法は清白である。決して清白の法以外に求めてはならない。清白の法以外に与えてはならない。清白の法以外によつて結ばれてはならない。それが私の心の底の願ひであつた。清白の法によらずして、人と交り、人を集めることは恐ろしいことである。かうした一見冷たい歩み方は、冷たそうに思はれ

て事實は決してそうではない。若し温かさを求めるならば、一切を超えて大法の中に生き、大法と大法とによって集つて、その上にあるべきである。そして我等は、その人間の愛を越えての彼方に、人間愛によって結ばれた以上の永遠の大悲の光懷を知った。そこには傷つけ合うことなくして、しかも愛しあう、同一念仏の兄弟の世界があつた。事實において、我等の集りほど尊いありがたい世界はない、との声を聞くことがあるが、この世界のみ浄土に通ずる世界である。

二十周年記念式典は、八月四日午前八時より、いとも厳肅に、衷心の喜びと願いとを持ちながら、しかしながら至つて静かに行われた。この朝、一、二の事故があつたために、かえつて軽々しく浮かれることを許されず、涙も笑いも封じられて、しかも新たな出発の門出としてきわめて有意義な式典であつた。

この度の記念講習会に当たつて、私の第一の喜びは、弟妹たちが、遠くは、満州国、東京から馳せ参じてくれて、七人の兄弟姉妹がことごとくそろい、この記念講習会に列して聞法してくれたことである。

「一、蓮如上人御病中の時、仰せられ候。御自身何事も思召し遺さるゝ事なしと、ただし御兄弟の中、そのほか誰にも信のなきを悲しくおぼしめし候。」(御一代聞書)

蓮如上人すらこの悲しみをもちたまうのである。信心は唯宿善開発の問題であるとは言へ、骨肉の兄弟が、念仏せざることは悲しいことである。われら如きの俗悪、望むべからざ

ることと思つていたのに、兎にも角にも、七人の兄弟及びその一家眷族が共にこの聖会に列して心より聞法し念仏してくれたことは誠に有難くも嬉しいことであつた。願わくば三宝の力、彼等をして真に念仏せしめ給はんことを。

二十周年を迎へても、新しい道は見出せない。所詮今まで通り、清白の大法を求めて独り歩ませて頂くだけである。一切を越えて「唯仏一道清くまします」九十五種の外道の声に動乱せられることなく大法の示したまうが如く歩ませて頂くことである。

微々たることながら、我が二十年の間法の歩みは、大法の如く信じ、大法の如く生きさせて頂くこと、そこにのみ、大悲そのまゝの世界の展開されることを如実に知らせて頂いた。強いて「如何に歩まんとするか」との間ひに答うるならば、「大法の如く」というより外にはあり得ない。順境の日には、大法の如く、逆境の日には、更に大法の如く、行づまった苦しい日にはいよいよ大法の如く、それでも行づまればいよいよ大法の如く、人來れば大法の如く、人去ればいよいよ大法の如く、賞賛にも大法の如く、非難にも大法の如く、一切に大法の如く、如実に仏智の光に相應し、随順して、一貫の歩みを成就させて頂き度い。これ誠に唯一にして、二つあることなき我が衷心の願いである。

秋が来れば、木の葉は紅葉して親木を去つて散つてゆく。時には、毛虫に葉を喰はれることがあり、木の髓を虫に侵さ

れることがあり、小鳥に巢をかけられたり、糞をせられたりすることがある。然し木にして生命が通うているならば、葉が落ちても心配することはいらない。必ず後には新しい芽が出来ており、小さい枝は大きくなり、梢には若葉が茂つて来る。風が来て枝を折らうが傷つけやうが、生命さへ通うているならば、さうしたことを通して木は大きくなり美しくなる。春、夏、秋、冬があることによつて、太くなり堅くなり、美しくなる。

落ちる葉を追うことなかれ。人間の情実によつて回顧することなかれ。山の奥、谷の間、街の中、島の影の念仏の希有華を拜んで、名利の為に動かざれ。尊きは、如来廻向の慧命であり、大法であり、道義であり、宗教である。

宗教は自覚である。強いて人を得んとするなかれ。追従を用ひず、妥協を要せず。教権に非ず。弥縫に非ず。ただ正直に教法の如く聞き、あるがまゝに合掌して、直ちに進んで止まることなかれ。

善導大師、難行雑修について十三失を挙げたもう中にいわく

「十、相続して彼の仏恩を念報せざるが故に。

十一、心、輕慢を生じ業行を作すと雖も、常に名利と相應するが故に。

十二、人我自ら覆うて同行善知識に親近せざるが故に。

十三、楽みて雑縁に近づきて往生の正行を自障障他するが故に。」

絶對他力の大信は恩徳報謝の生活にあり、若し念報仏恩の念なくば、

一 仏の本願に相應せざるものであり、

二 世尊の教と相違するものであり、

三 恒沙諸仏の護念証誠の仏語に順はざるものである。

この三法に対して不忠実であるものは、それによつて、雑行、雑教、雑人、雑処等の「雑縁に乱動せられて正念を得ざる」ものである。この「雑縁乱動して正念を失す」ことを総じて第一の失にあげられている。

先にあげられたる十、十一、十二、十三こそは特に頂くべき金言である。聖人はこの四ヶ条を、真門二十願の失として挙げたもうた。二十願の念仏の世界は、法は正行にして修する心が雑修である者のことである。正法を挙げつゝ自らは正法を修せず、浄土の三部經を誦誦し、如来浄土の徳を觀察し、弥陀を専礼し、名号を専称し、弥陀を讚嘆供養する、此の五種正行を表にして、しかも内信心の如実ならぬものを雑修自力といわれるのである。正行を修する者、必ずしも正修専修ならぬことを示したまいしは、唯三国を通じて今家の聖人のみなるに、その御苦勞もこれを水泡となし、寺に正行あるかに見えて雑修のみ多く、念報仏恩の相続なく、心に輕慢を生じて、仏法を修しつつ、名利と相應せしめんとす。聖道の名利、この名利を追うこと、これ誠に雑修の一大特色である。

自ら恃んで他を輕んずるを輕慢という。我なればこそこの功德を修する、我なればこそこの法を……この輕慢、汝の最大の敵である。名利は貪欲よりおこる愚痴の一分である。あ

さましい愚痴である。見よ、身、仏道につかえつゝ、その心内ひそかに名利を追うあさましい相を見よ。意想間断して一心ならず、一貫相続の節操なく、名利におびやかされるかに見ゆれば、前の行者も今は娼婦の如く、右顧左眄して色を変え、一貫の行歩を失い、悪魔をして便りあらしめ、その乗ずるところとなつて、貪瞋諸見の来つて誘うままに雑縁に近よる。

足もと崩るるに至つて、焦燥していよいよ姑息、追従、嫉妬、懇親、策動、隔執と、悪心八万四千と乱動して「往生の正行を自障碍する」に至るのである。価値の評価乱れて、己れを支持する一片の枝葉も糟糠も百万力に見え、仏の金言も不退の菩薩もこれを弊履の如く捨てて顧みず、これを「人我自ら覆うて同行善知識に親近せざるが故に」と仰せられるのである。「人我自覆」とは「俺が、私が」と我がものを言い、人に負けまい、人に劣るまいと我情をつのることであり、自ら覆うとは善悪是非邪正等の見分けのつかぬことである。見わけがつかねばこそ、師恩を忘れて同行善知識に遠ざかり、悪知識、雑縁（異学、異見、別解、別行、悪見人のこと）に近よるのである。されば善導大師は「雑を修して至心ならずば千中無一なり」と仰せられた。

われらは今、新らしく出発せんとす。盛大を求むべからず。多人数を求むべからず。正しさを求むべし。仏法を仰ぐべし。名利を追うべからず。光明団にあること、世俗の名利と矛盾するが故に苦しむ人は、この機会に脱退せられて然るべく、いよいよ仏道に精進し専念して、迫害をも非難をも貧困をも、

大信心のうちに超克し、一生を大法の為にあらしめる人のみ、われらが隊伍に残りたもうであろう。

大衆は心を打つ真実の菩薩道を求めて、教権のもとに屈従せず、仏法を聞いて布教師となろうとせず、自己の社会的立場を守るために大法を歪曲せず。直ちに大法を聞いて共に鳴つて踊躍歓喜する。菩薩は人間の野にあり、仏法的立場の固守者の中にあらず。菩薩の徳草は浄土の徳風になびいて煩惱の悪風によつて動かず。われらは今、僧を求めず、俗を求めず、男を求めず、女を求めず、学者を求めず、無学を求めず、唯大法を求めて進まんとす。

俗典にすら「富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず」と言うではないか。剛梁なるべからず、柔弱なるべからず、柔軟金剛の清浄真実なる大心海に安住して唯一道を精進せん。

回顧すれば八丁堀の旧本部に於いて十五周年の記念聖会を開いてより五年、この五年間はまことに本団をして今日あらしめたまことに重要な歴史の成就であつた。その昔に、たとえ大講演会に千人の人を得るとも、それはただ千人にして千人であつた。しかるに十五周年においてはじめて、百人にして一人たるの風格を成就しはじめ、今にしてようやく、集る者は同一の信火に燃え、大法によつて一体たるを得るに至つた。ここに於いてわれらは次の如き結論と確信とを得ることが出来た。

「ただ、大法の如く歩んで恐れざれ。真実のみ末通りたもうが故に。」

慈父、真実の教を説いて永遠の大道を顕示したまい、悲母、光明の大悲懐に撰取して安住せしめたまう、慈父悲母の善巧のみわれらが無上の信心を發起せしめて、一切を超えてわれらをして清淨願往生心の白道にあらしめたまう。

大法に身命を捧げよ。何等の報酬を求むることなく、大法の為に全身を捧げよ。大慶喜汝にあり、大歡喜汝にあり。汝、命を捧げて歩め、必ず命を捧げる人、汝と共にあらん。大法の中にあつて算盤を弾く僧侶の周囲には算盤を弾く人のみあり、正法を己が名利の具にせんか、そこに集る者もまた不淨雜惡の人のみであろう。

心内に巣くう自力我執我慢にして、一度、名号の真実によつて全否定の大鉄槌を受け、無我の深信を成就せんか、そこに如来淨土の光悦は開き、彼岸の真実は現実人生の真実内容となる。一切道義の根底はここに成就して、親に対して孝となり、親の道、夫の道、婦の道、行くとして可ならざるはなきに至るであろう。われらはかつて、本仏に対して信成就せる者にして、この世の親に対して不孝なる者を一人として見たことがない。道の道、一切の道をして成就せしむる根元である。されば経には「信は道の元、功德の母」と説かれたのである。道義不退の菩薩は、妄念妄想を妄念妄想と知つて世の雜縁にあるも、如何なる時と所とを問はず、不退の道義を展開するであろう。真実のみ末通る。無条件に真実のみ末通る。

「ただ大法の如く歩んで恐れざれ、真実のみ末通りたまうがゆえに。」

われらが光明団の行歩をして、この一句の如くならしめたまえ。われらをしてこの一句の如くならしめたまえ。わが信條のすべてである。わが団の歴史をして、変易生死せしめたまえ。されば、われは重ねて言う。

「順境の日には大法の如く、逆境の日には更に大法の如く、行きづまった苦しい日にはいよく大法の如く、それでも行きづまればますます大法の如く、人來れば大法の如く、人去ればいよいよ大法の如く、賞讃にも大法の如く、非難にも大法の如く、一切に大法の如く、如実に仏智に相応し、隨順して、一貫の歩みを成就せよ。」

これすなわち今日のわれらの全てである